

年満月

今年も、あと僅かとなりました。心なしか慌ただしく、気が急かされる日々が続きます。師走という言葉がぴったりの感じがしますが、一体何故、12月を師走と表現するのでしょうか。

「十二月には法師を呼んで経をあげる習慣があり、僧が忙しく走りまわる師馳(しはせ)が訛って師走になった」という説がありますが、これはどうも後付の理屈のように思います。というのは、古く「万葉集」に「十二月」のことを詠んだ歌があるからで、その歌を見る限り師走という言葉とは結びつきません。

万葉集の1648番目の歌に

十二月(しはす)には
沫雪降(あわゆきふる)と知らねかも
梅の花咲く含(ふふ)めらずして

というのがあります。

日本古典文学大系(岩波書店)の解説によると、「十二月(シハス)の語源は未詳。シが年を意味し、ハスは果ツと同じか」と書かれており、歌の大凡の意味は「12月にはまだ沫雪(あわゆき)の降ることがあると知らないからか、梅の花が咲く。蕾のままでいずに。」というものです。

私たちも、大晦日までまだ日数があるのに、早々と来年のことに心動かされている、そんな今の心境にたいして、何をそんなに気ぜわしく、といわれているような感じがします。

12月に入ると、忘年会に繰り出す人の群れをあちこちで見ますが、最近、今年のことはさっさと忘れて来年に期待しようという訳で、忘年会ではなく望年会という言葉を使う人までいます。

確かに、今年は、東日本大震災を初め災害が多発しましたし、依然として景気も悪いということで、辛い事の多かった1年ではありましたが、そうはいつでも、御破算で願いましてはとばかりに、今年のことを忘れるわけにはいきません。

若くて、背伸びをしていた頃は、新しい年が巡って来ることを至極当然のよ

うに思っていました。しかし、既に高齢者の仲間入りをした身とすれば、この1年、365日の積み重ねは、他に代え難い、誠に貴重なものを感じています。

山下景子さんの「美人の日本語」という本の中に「年満月」という言葉を発見した時は、「我が意を得たり」と思いました。

嬉しいことや悲しいこと、様々なことが、1年という「時間の器」の中に積み重なり、満ちるように過ぎて来て、今12月も終えようとしています。

師走、師走といいながら急ぎ足で過ごすだけではもったいない気がします。残された今年的时间を愛おしみ、この1年に感謝しながら過ごす「年満月」というのも、素敵ではないかと思えます。(塾頭 吉田 洋一)